

3つの目で見た郷土香川《第18回》

女木島紀行～

今回は備讃瀬戸にある女木（めぎ）島へ旅してきました。女木島は桃太郎の鬼退治で有名であり、鬼ヶ島とも呼ばれています。高松から雌雄（しゅう）島海運のめおん2（右最上写真）に乗船し約15分で女木島に到着すると、鬼ヶ島おにの館（右上2番目写真）があります。ここには、鬼ヶ島大洞窟までのバス切符売り場、レンタサイクル、昼食時には軽食の提供、鬼の館展示室など、女木島観光の拠点になっております。



女木島観光のメインは、鬼の住まいとされた鬼ヶ島大洞窟（右上3番目写真）には、鬼ヶ島おにの館からは鬼ヶ島観光自動車のバスにて約10分で行くことができます。大洞窟の入口は高さが低く、しゃがまないと頭をコチンとするので、ここでは安全の為にヘルメットが準備されています。中はヒンヤリとしていてまるで天然のチルド状態？、そして鬼の臨場感を醸し出すように写真（右最下段）のような展示、鬼の力水は日照りでも枯れることがないそうです。鬼大将の部屋の鬼もそうだが、目つきがそんなに怖くない。もし怖かったら場所柄、子供なんか泣き出しそうかな……。中程からは高さもそこそこあり移動しやすいのは、前半は防御、後半は脱走を考えている模様です。



この大洞窟は、紀元前100年頃に中国の要塞を参考につくられたとされ、1914（大正3）年に香川郡上笠居村（現在の高松市鬼無町）の郷土史家橋本仙太郎によって発見され、1931（昭和6）年に一般公開されるようになりました。入口から出口まで400m、面積4000㎡あります。



出口のやや上を振り返ると、溶岩が冷却凝固するときに生じてできた玄武岩の柱状節理（ちゅうじょうせつり／直下写真）があります。多くは五角柱状ですがまれに四角や六角の柱状もあるそうです。





大洞窟出口から遊歩道を上に進むと標高 188 ㍎の鷲ヶ峰展望台です。この展望台は瀬戸内海が 360 度見渡せるパノラマ展望、南側は女木島港、高松市街地が見えます（右最上写真）。



さてここから港までは徒歩の旅です。大洞窟バス亭からバスは大回りして行きますが、徒歩は遊歩道が整備されておりますが、でこぼこの石階段、落ち葉の時期で手すりはあるのですが、足下に注意しながら下りていきました。石階段を下りきると再度バスの通る道に出て、そして別の頂きへと上がっていくと、標高 200 ㍎に日蓮大聖人大露座像（右上 2 番目写真）が鎮座しておられます。元は京都伏見のお寺にあったのが処分されるところを、様々な経過を経た後に最終的に島の人達が引き取り 1937（昭和 12）年 4 月 28 日に開眼式が挙行されました。



この後頂きから下りていくと、世界最小のメロン畑があり、説明書によると女木島しかない MG 16 という学名です。そしてもう少し下りてゆくと、釣りバカ日誌の第 1 話では、女木島からフェリーに乗って高松に通勤するシーンが登場しますが、この浜ちゃんの家（右上から 3 番目）があるんですね。実は大洞窟行くバスの沿線なのですが、大抵の方は気がつかないまま風光明媚な景色を通り過ぎていきます。

坂道を下りきった所には、海の神様をお祭りしている住吉神社（右下写真）があります。隔年毎（今回は 2015 年）の 8 月第 1 土日に開催される大祭では、太鼓台が海の中に入っていき暴れ太鼓が見どころだそうです。港まで戻ると、海岸沿いの家並みにはオーテ（表紙写真）があります。これは島ではオトシ

と呼ばれている北西の季節風が山頂にあたり方向を変えて吹き下ろしてくるし、波しぶきや霧状になった海水が家の中に浸入するのを防止する目的で建築され、高さ 3～4 ㍎、長さ 10～20 ㍎程度の規模でした。これらの家並みの中は細い路地で、まるで迷路のようでした。

鬼ヶ島おにの館周辺には、モアイ像が何故かありますが、現地モアイ像の紹介石碑によると、1995（平成 7）年にチリ・イースター島に 15 体のモアイ像の再建に関わった（株）タダノが、つり上げテスト用に作成したモアイ像を 1996（平成 8）年に高松市に寄贈されたものです。また周囲には瀬戸内芸術祭の屋外展示物がそのまま残されており、「20 世紀の回想」という黒いピアノに船の帆柱をイメージしたような作品、港周辺に数多くたたずんでいる「カモメの駐車場」は、カモメが風見鶏のように風が吹くと一斉に方向を変えるという作品です。



《参考資料》

- ・鬼ヶ島観光協会ホームページ